

## 周作人と与謝野晶子：両者の貞操論をめぐって

阿莉塔  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/8347>

---

出版情報：九大日文. 1, pp.131-149, 2002-07-25. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会  
バージョン：  
権利関係：



# 周作人と与謝野晶子

——両者の貞操論をめぐって——

阿莉塔

はじめに

周作人は、日中戦争中、汪精衛政権に協力したことで、戦後、戦争犯罪者として裁かれ、「漢奸」<sup>1)</sup>と呼ばれることになったため、その優れた文学者としての存在は長い間無視されてきた。また、一九四九年以降は、中国の現代文学史が政治の強い影響下において、左翼文学史となってしまうため、周作人に対しては真摯な学術研究の代わりに単純な批判ばかりが行われることになってしまった。一九八〇年代に入って始めて、中国での周作人研究が盛んになり、散文家、文学理論家、思想家としての周作人が次第に評価されるようになった。しかし、周作人に対する全面的な研究はまだ始まったばかりである。とりわけ周作人の女性論についての研究は不十分といえる。

周作人は執筆活動を始めた一九〇四年の時点から、既に女性問題についての文章を書いているが、特に五四新文化運動の時期か

ら、女性解放問題についての論が多くなる。その後、五十年代の初め頃まで、女性問題を取り扱う文章を間断することなく書きつづけた。特筆すべきは、五四運動の最中においても、終始女性問題から目をそらそうとしなかった点である。封建道徳に反対するということが五四新文化運動の重要な内容の一つであり、中でも、男尊女卑的儒教道徳に縛られている女性の問題は特に深刻であったにもかかわらず、当時、周作人及び何人かの男性をのぞいてこの問題の重要性に気づいた人はいなかった。同時に、彼は外国の学者の婦人問題論にも強い関心を持ち、その中に、与謝野晶子が大正時代に書いた婦人問題についての評論があったわけである。

周作人の与謝野晶子への関心を示すものに、彼の翻訳活動がある。彼は実際に与謝野晶子の評論を翻訳紹介している。「貞操論」<sup>2)</sup>では与謝野晶子の「貞操は道徳以上に尊貴である」<sup>3)</sup>の全文を、「愛の創作」<sup>4)</sup>では与謝野晶子の「愛の創作」<sup>5)</sup>の一部分を、「女子と読書」(1944)では与謝野晶子の「雑記帳」<sup>6)</sup>の一文章を翻訳している。

周作人はなぜ与謝野晶子に関心を持ったのか。最大の理由は、自分の主張に対する共鳴者を日本で見つけて、それを武器にして当時の中国の女性問題を解決しようとしたということである。両者の女性問題に関する主張には共通点が多い。例えば、「靈肉一致」の貞操論や愛情の創作説である。

本稿<sup>7)</sup>では以下、周作人が与謝野晶子の女性問題を取り上げた文章、主に「貞操は道徳以上に尊貴である」を中国に翻訳紹介し

た点、そして、その紹介によって近代中国に刺激を与えた点、及び両者の女性解放の主張に共通点が多い点に着目し、周作人と与謝野晶子の女性論を女性の性の解放の側面から比較しつつ、フェミニストとしての周作人の存在、その背後に存在した与謝野晶子との関連の経緯、及び与謝野晶子の女性解放論への再認識の問題を考察してみたい。

### 一 与謝野晶子の「貞操は道德以上に尊貴である」をめぐって

本節において、周作人が「貞操は道德以上に尊貴である」を翻訳した理由と意義、与謝野晶子の貞操論の内容について、具体的に見てみる。

周作人は早くから女性問題に関心を示していたが、女性問題の研究において、体系的思想、理論を作りあげたのは五四新文化運動が始まって以降のことである。彼は、女性問題には女性の性の解放と経済的な解放という二大問題があると指摘しているが、特に、前者の女性の性の解放を強調している。なぜなら、女性の性は何千年も続く封建的専制体制によって最も深く支配され、圧迫されてきたからである。この問題をまず解決しなければ、経済問題をはじめとする他の問題の解決は話にもならないのである。女性の性の問題とは、一言で言えば、女性を一人の人間としてみることであり、女性に自分の人格を持たせることであり、男の所有物ではなくなるということである。

この問題は簡単そうに見えるが、解決することは極めて難しい。新文化運動が始まった時点から、女性解放の問題は検討された。例えば、陳独秀は『新青年』第一巻第一号（1915年9月15日）にフランスの Max O'Rell の「婦人観」を英中対訳の形で訳し、孟明は『新青年』第一巻第四号（1915年12月15日）に日本の小酒井光次の「女性と科学」を訳し、雑誌『新青年』は第二巻第一号（1916年9月1日）から第三巻第五号（1917年7月1日）にかけて合わせて九回にわたって女性問題のコラムを連載した。しかし、当時、女性解放の提唱者の多くは、ただ問題の発見及び批判に関心を持つのみで、一体どのようになれば問題の解決になるかということについて、理論的指導をしたり具体的な提案をしたりすることのできる人物は極めて少なかった。その上、女性問題は長期間にわたって継続検討されることがなかったという点がある。実際、『新青年』では「女性問題」というコラムが開かれたが、寄稿者がわずか五六人しかいなかったことは、このことをよく証明していると言える。

この時期、周作人は新文化運動において大いに活躍して、特に女性問題について、体系的研究を行いはじめた。彼がこの問題について特に重要な研究成果を発表した年は、一九一八年と一九二三年である。前者の場合にはちょうど新文化運動の最盛期であった。彼は、一九一八年五月には与謝野晶子の論文「貞操は道德以上に尊貴である」を翻訳し、十月には彼の論文「愛の成年」<sup>8</sup>の中でカーペンターと H・エリスを紹介し、年末には有名な論文「人の

文学」<sup>9</sup>を発表した。張鉄栄が「初めて系統的に五四新文学の発展する方向を明らかにし、五四以後の新文学の誕生のために、理論的基礎を定めた」<sup>10</sup>と指摘したとおりである。この時期の周作人の女性解放論の最大の特徴は、主に外国研究者の女性問題論を紹介するところにあつた。目的は、中国の女性問題の研究を啓発するためである。

周作人はこの時期、外国の新文化、新思想、新道德の吸収を大いに提唱している。彼はこの主張を、「最近三十年における日本の小説の発達について」という講演<sup>11</sup>で次のように詳しく述べている。「日本の文化は、おおむね創造的な模倣といえるであろう。(中略)日本の文学界は、自覚的に、あえて他人の長所を認め、誠意をもって模倣しえたので、独自の著作を多く生み出し、二十世紀の新文学を創りだすことができたのである」<sup>12</sup>。これに比べると、「中国は新小説を提唱して二十年余り経っているが、結局ちつとも成果があがっていないのである」<sup>13</sup>。その理由は「中国人は模倣しようとはしないからであり、模倣することもできないからである」<sup>14</sup>。このような弊害を除去するには、「歴史的な因習的思想を捨て、本心から他人を模倣しなければならぬのである。そうすることによって自然に模倣から独自の文学が誕生することができるのである。日本はそのよい例である」<sup>15</sup>。そして、最も大切なことは、「即ち外国の著作の翻訳と研究を提唱すること」<sup>16</sup>である。要するに、「中国は新小説を発達させるためには、一から始めなければならない。現在欠けている最も重要

な本は、小説とは何かについて論じた『小説神髓』である」<sup>17</sup>と述べている。坪内逍遙の『小説神髓』の「神髓」にあたるものは、つまり周作人の提出した「人の文学」という主張である。上記の記述から、彼のこの時期における文学活動の中心的課題は、「外国の著作の翻訳と研究を提唱すること」であることが分かる。彼は女性問題を研究する際においても、このような主張を貫いていた。

一九二三年に至り、周作人はストープス夫人の『結婚の愛』(一九〇八年初版)を大いに推賞し、与謝野晶子の「愛の創作」を翻訳し、大々的に家庭の「愛の術」(『結婚の愛』)を広める呼びかけをするようになる。彼は当時、終始女性の利益を維持する立場に立ち、女性の獲得すべき権利、地位の向上を目ざして発言していた。この時期から、彼は「人の文学」(前掲)において主張した「霊肉一致」を目指すという人生観を両性関係の改善に用いることになる。H・エリスから西洋の中庸思想を学び周作人本来の中庸思想を発展させるとともに、エリスの著作から性の知識を獲得し、彼独自の性道德観を作りあげた。周作人は、これを出発点として、女性の性の解放における具体的な方法を提案していくのである。そして、それを実行するために、終始古い道德を批判しつづけたのである。

与謝野晶子と周作人は、異なった文壇で活躍していた同時代の文学者である。与謝野晶子は歌集『みだれ髪』を発表して一躍歌人となった。明治四一(一九〇八)年を境として、与謝野晶子は歌人

から歌人兼評論家へと変身していく。彼女の評論の内容は詩歌・小説についてのものから次第に女性問題の方に集中していった。特に、大正時代、与謝野晶子は婦人問題を中心とする評論活動で最も注目されるようになった。この時期の評論において、彼女は女性の覚醒と内面的な自己の改造を呼びかけている。

日本で、貞操問題が、最も盛んに議論された時期は一九一四年から一九一七年の間であった<sup>\*18</sup>。雑誌『青鞥』を舞台として行われた有名な貞操論争（一九一四年～一五年）もこの時期に行われたのである。大正時代は、明治時代の封建的家族制度や良妻賢母主義がまだかなり勢力を振るっていたため、女性を束縛する貞操の問題が重要な問題として議論の的とされたのは当然であった。この時期、女性問題を議論する舞台となったものに、雑誌『中央公論』、『太陽』、『青鞥』などがある。与謝野晶子の評論活動は『太陽』を中心として行われた。『太陽』で「婦人界評論」の執筆を始めていたが、他の雑誌、新聞の寄稿依頼も受けていた。

彼女の評論の最も大きな特徴は、内容が常に彼女自身の実体験や婦人の実生活に繋がって論じられているところにある。明治四五年の欧州外遊以降、彼女はこの点を特に意識的に強調している。彼女自身の言葉で言うと、「欧州の旅行から帰って以来、私の注意と興味とは芸術の方面より実生活に繋がって思想問題と具体的問題とに向かうことが多くなった」<sup>\*19</sup>になる。

彼女は貞操論を述べる時もまさにこの視点から出発している。渡邊澄子氏が「晶子の成長過程は、まさに民権運動の鎮圧の後に

復活した儒教道德の教育体制強化に躍起の時期に当たる」<sup>\*20</sup>と指摘しているように、与謝野晶子は儒教道德教育の被害者である。同時にそれへの反逆者でもある。だから、旧道德への痛烈な批判が彼女の貞操観の中核を成り立たせているのである。また、そのため、女性に厳しく男性に甘いという旧道德の本質を指摘することができたのである。更に、その旧道德によって維持されている「一夫多妻の制度」によって生じた様々な矛盾を一々具体的に指摘したうえで、「貞操は道德ではない」という自分の主張を述べ、また、自身が処女としての貞操、妻としての貞操を守ってきたという実体験から「貞操は趣味であり、信仰であり、潔癖である」と主張するようになったのである。彼女のこのような貞操観を最もよく表しているのは「貞操は道德以上に尊貴である」という文章である。

与謝野晶子のこの評論は周作人によって中国に紹介された。周作人の翻訳「貞操論」は、一九一八年五月雑誌『新青年』第四巻第五号に発表された。「貞操論」は与謝野晶子の第三評論感想集『人及び女として』の中の「貞操は道德以上に尊貴である」を訳した部分と訳文の前の解説及び訳文の最後の段落に挿入された周作人の短い括弧で括られたコメントによって成り立っている。

以下、与謝野晶子の「貞操は道德以上に尊貴である」について、検討する。

彼女はこの評論の冒頭で「私は貞操を最も尊重し、貞操を最も確実堅固な基礎の上に据えたいために此一文を書きます」と述べ、

この評論の目的を明らかにしている。そして、最も真実な、最も自由な、最も正確な、併せて最も幸福な生活を実現したいという実感を基礎として一切の問題を対処して行かなければならないと主張する。しかし、これを実現しようとするときには必ず昔の貞操道徳観とぶつかり、矛盾が生じる。彼女はその矛盾を痛感し、それに対し疑問を投げかけながら自分の貞操観を表明する。

まず、旧道徳について指摘する。貞操は女には守ることを強要し、男には寛仮されるといふような矛盾のあるものなら、それは人間生活を破綻失調させる旧道徳であつて、信頼できない。また、誰にも一律に強要して、かえつて大多数の人間が虚偽、压制、不正、不幸に泣かねばならぬといふようなものなら、それはやはり現代の道徳として見る事ができない。

次に、貞操の概念の不透明さについて追究する。貞操は精神的なものか、肉体的なものか、霊肉一致のものか、はっきりしていない。もし精神的なものだといふなら、異性を見て情を動かしたことは既に精神的に純潔を破つたものになる。結婚においても、夫婦として肉体的な関係を持ちながら精神的に極めて冷淡であることや、また肉体的な関係も無く精神的にも憎み合いながら同居していることなどは明らかに精神的に貞操を破つていふことになるが、それでも、貞操道徳によつて咎められることはない。もし貞操は肉体的なものだといふのなら、再婚であろうと強姦や売淫であろうと、それらの性的行為をした人たちの貞操は破壊されたことになる。もし貞操が霊肉一致のものとするなら、それを実現

させる社会制度はまだ現時点では備わっていない。恋愛結婚こそが霊肉一致の結婚を実現させる条件であるが、恋愛の自由が許されていないため、霊肉一致の貞操を道徳として期待することはできない。

与謝野晶子は以上のような疑問を述べた後、今後の道徳は「人間各自の生活をより真実に、より自由に、より正確に、より幸福にするための自制律である」べきだと主張する。結婚については、次のように述べる。形式を無視して夫婦関係を結ぶ男女が植えていくであろう。つまり、愛情が合へば協同関係を結び、愛情が破裂すれば分かれてしまふということである。したがつて、貞操は道徳ではなく、趣味であり、信仰であり、潔癖であると主張するのである。というのは、趣味や信仰は道徳のように人に強要すべき性質のものではないからである。

周作人が与謝野晶子の「貞操は道徳以上に尊貴である」をどのように評価したか。

彼は「貞操論」の解説の中で、与謝野晶子の「貞操観」に対し、まず、この文章全体に現れている思想は「健全な思想」であると肯定している。そして、晶子の評論について次のように評価している。

その見識と議論がみな公明正大である。私どもの意見では、現在日本における第一流の女性批評家であり、極めて進歩的であり、自由であり、真実をとらえており、公平正直な大婦人である。<sup>\*21</sup>

周作人は与謝野晶子の評論を「公明正大、真実」という言葉で肯定している。与謝野晶子の「貞操論」については彼は一九四四年に書いた「女子と読書」の中で「私は民国六年に『貞操論』という文章を翻訳したことがあり、『新青年』に載った。現在でも与謝野晶子のこの最も早い評論集をよみかえすことがあるが、この中にはすぐれた議論がたしかに少なくない。」と述べている。これらの発言から、与謝野晶子の貞操論及び他の評論が周作人に大きな刺激を与えたことが分かる。

周作人はなぜ、与謝野晶子の「貞操は道德以上に尊貴である」を紹介しようと思ったのか。

それはまず、与謝野晶子の新しい道德観に興味を感じたからであると言える。与謝野晶子はこの文章において、「在来の意味での結婚其物を疑つてゐる姿勢を示し、「愛情が合へば協同関係を結び、愛情が破裂すれば分かれてしまふ」という当時では極めて新鮮な両性道德観を紹介した。このような主張は、当時の中国における「三分の二以上の男性が二人以上の妻を持つ」<sup>22</sup>一夫多妻の社会に大きな衝撃を与えたことは言うまでもなく、「抑圧され、解放を切に求めている中国の女性への福音であり、伝統的婚姻の束縛と圧迫の下で苦しみがいてる中国人への福音である。」<sup>23</sup>とまで評価されている。さらに、自由に結婚と離婚をすることができるといふ主張は、知識階層の男女にも刺激を与えたに違いない。与謝野晶子のこの文章は「あたかも中国のために書いた文章のように、中国の伝統的婚姻の欠点を鋭く衝いてい」<sup>24</sup>る。

また、彼女は、貞操問題を論じる時、「貞操を最も現代的に道德として擁護したい」と述べ、「真実の道德を建設」するべきだと主張している。新しい道德とは、「人間各自の生活をより真実に、より自由に、より正確に、より幸福にするための自制律」である。

このような道德観は、まさに周作人がこの時期に考えていたへ人の生活<sup>25</sup>を建設しようという大きな人生の課題とぴったり一致したのである。彼はこの時期、中国の現代文学界にとつて当時最も必要とされた書物として中国の『小説神髓』を書く覚悟をしていた。つまり、〈人の文学〉の理論的指導書を書くつもりであったのである。いわゆる人の文学とは、必ず人間の真実な生活を描くものでなければならぬ。彼の言う人の中には勿論女性も含まれている。それは、これまでの中国において重視されてこなかったものである。従つて、彼はこの時期、特に女性問題及び両性問題に関する外国研究者の研究に強い関心を示したのである。また、彼は「女性自身の事については、女性でなければ知ることができず、女性でなければ言いえないのである」と信じていたので、特に女性研究者の女性問題論に着目している。まず第一にあげられるものは、与謝野晶子の貞操論を紹介したことである。周作人はまさに彼女の大正初期の評論に興味を覚えた<sup>25</sup>。

周作人が与謝野晶子の「貞操は道德以上に尊貴である」に注目したいま一つの理由として、先進的な女性論を紹介し、中国における女性論研究者の参考に供したという点があげられるが、この点も周作人の外国の新文化を紹介することを目指した初志と一致

している。周作人は与謝野晶子の貞操論を一般の読者に紹介するだけではなく、女性問題の研究者にも紹介しようと思ったのである。彼はこの点について明確に述べている。女子問題に対して「女性自身がとりあつかおうとはしないので、男性がやむをえず先に研究するようになった。一般の男性はあえてかわりあおうとはしないので、結局ごく少数の覚醒した男性が研究するようになったのである。私はこの文章を訳したのも、彼らごく少数の男性の参考にするためである。」<sup>\*26</sup>と。当時の女性解放の提唱者たちは古い道徳への批判を精力的に行っていたが、一体具体的にどのような新しい道徳を作るかについては、まだはつきりとした考えを持っていなかった。雑誌『新青年』を主な舞台として、陳独秀の訳文「婦人観」をはじめとして様々な女性論が発表された。纏足から女性参政権まで女性論者の議論は実に幅広いものであった。その中に、すぐれた論が全くなかったわけではない。例えば、高素素は「女子問題の大解決」<sup>\*27</sup>において、男尊女卑の社会では女性の人格が全く認められていないことを指摘し、家族主義を破壊しようと呼びかけている。しかし、全体的に見ると、当時の女性解放の主張はみな既存の問題の指摘や批判の域に留まっていた、それを突破することができなかった。特に、貞操について専門的に論じる文章は殆ど見られなかった。そういう状況の中で、与謝野晶子の貞操論は異彩を放つものとなった。彼女は古い道徳に対して、その問題点を鋭く突く指摘をただけでなく、具体的な新しい貞操観を提出した。「貞操は趣味であり、信仰であり、潔癖で

ある」という彼女の主張は、周作人らの女性解放の提唱者にも新鮮な感じを与えた。その結果、貞操論の発表後、一般の読者の間ではなく、女性問題の研究者の間で貞操論争が行われたのである。

周作人が「貞操は道徳以上に尊貴である」を翻訳した理由として、木原葉子と張競は「褒揚条例」を重視した見解を述べている<sup>\*28</sup>が、私見では必ずしもそうとはいえない。周作人は最初から意識的に「褒揚条例」を批判する狙いを持ってこの文章を翻訳したとは言えないのである。なぜなら、「褒揚条例」は既にその四年前の一九一四年に公布されているからである。しかし、貞操論を発表することが、「褒揚条例」に対する批判の役割を果たしたことは言うまでもない。

「褒揚条例」<sup>\*29</sup>とは何か。一言で言えば、寡婦の再婚の禁止や強姦に遭った女性に自殺を勧めるといった条例である。辛亥革命後、袁世凱が一九一四年三月に所謂「褒揚条例」を公布した。道徳的に優れた者を表彰するための条例である。

これは五四運動のわずか四年前のことであった。辛亥革命によって漸く封建時代をひっくり返し、女性解放の新たな動きが見えるようになった時に、また清朝の表彰規定を復活させることになりはしないか。この条例に対する批判は、陳独秀を中心に行われた。例えば、彼は、「憲法と孔子の教え」を『新青年』第二卷第三号（1916年11月）に、「孔子の道と現代生活」と「袁世凱復活」を『新青年』同巻第四号（同年12月）に発表し、「褒揚条例」を



批判している。

こういう時代背景もあり、周作人の訳文は発表された後、たちまち中国のマスコミ界、文化界などの大きな反響を呼んだ。詳しくは次の節で述べる。

## 二 「貞操は道德以上に尊貴である」翻訳後の反響

本節では、周作人が「貞操論」において与謝野晶子の「貞操は道德以上に尊貴である」を翻訳したことがきっかけとなり、中国の文化界で貞操・両性道德などをめぐって行われた有名な貞操論争の経緯、内容、意義などを明らかにする。

周作人は「貞操論」の前言の中で次のように述べている。『新青年』が女子問題についての論文募集を半年ぐらい行うことがあった。当初応答する文章が幾つかあったがその後、数ヶ月は何の反応もなかった。論者の統計によると、『新青年』は第二巻第一号(1916年9月1日)から、第二、三、五号と第三巻第一、二、三、四、五号(1917年7月1日)の合わせて九回、十ヶ月にわたって「女子問題」の原稿の募集を行った。第四回目の募集でやっと応募に応じた文章があり、それは二人の女性の書いた文章であった。その後、三回にわたって五人の応答の文章があったが、著者はみな女性だった。内容は女子教育、結婚、家庭、育児、女権といった多くの面に関するものである。第三巻第五号からは応答する文章もなくなり、第六号からは女性問題の募集要項も出さなくなった。

周作人が「貞操論」(第四巻第五号、1918年5月15日)を発表するまでの十ヶ月間、『新青年』に載った女子問題について書かれた論文は陶履恭の「女子問題」一編しかなかった。

女子問題の議論が下火になった状況の中で、彼は与謝野晶子の女性問題に関して論じる文章を翻訳して、「女性問題は、結局大きな問題であって、切実に研究しなければならない。」<sup>30</sup>と述べているように、自らの女性問題への関心の有り様を表明し、同時にこの問題への人々の関心を喚起した。「貞操論」を発表したその二ヶ月後の『新青年』第五巻第一号(1918年7月15日)に胡適の「貞操問題」が発表された。さらにその一ヶ月後に唐俟というペンネームで発表された魯迅の「私の節烈観」があらわれた。両者とも周作人の「貞操論」に対して貞操や両性道德についての見解を展開した文章であると指摘されている。また、「貞操論」が発表された十一ヶ月後には、『新青年』第六巻第四号(1919年4月5日)で貞操問題をめぐって論争が行われた。

まず、胡適が「貞操問題」の冒頭において次のように述べている。

私は周作人先生が訳した与謝野晶子の貞操論を読んで、たいへん感銘を覚えた。この問題は、世界において数千年の無意識な迷信を受けてきた。最近数十年になってはじめて、何人かの西洋の学者によって、この問題の真の意義が正式に議論されるようになった。(中略)現在では、専制体制が最も酷い日本においてもこのような大胆な議論が生まれるようになった。これは

東洋文明史において極めて祝賀すべきことである。<sup>\*31</sup>

胡適がここで言う「迷信」とは貞操という迷信のことを指す。

貞操問題の中でも最も理屈に合わないのが「守節」と「殉烈」の風俗だと指摘する。さらに与謝野晶子の「貞操は女のみに必要な道徳でせうか。貞操は男にも女にも必要な道徳でせうか。」（「貞操は道徳以上に尊貴である」という貞操への疑問は中国にとつてより一層重要だと言う。なぜなら、「中国の男たちは自分の妻に彼らにかわつて貞操を守ることを要求し、彼ら自身は公然と女買いをしたり、妾を囲つたり、女をひっかけたりするのである」<sup>\*32</sup>からである。最後に彼の貞操問題に対する意見を以下の三点にまとめてみる。即ち、貞操の真の意義を考えるべきである。貞操は男女がお互いに対してとる態度である。現存の貞操を賞揚する法律に絶対に反対する。

続いて、魯迅が「私の節烈観」では、現在の節烈は極く一部分の女性にのみ強要されるものであり、その女性を死に至らせるのを目的とするものであるので、決して道徳とはいえないと指摘する。更に、魯迅は「自他両利」という新しい道徳を提唱し、最後に、「世の中の自分を害し他人を害する昏迷と強暴を除去しなければならぬ。人に苦痛を与えたりそれを楽しんだりするような昏迷と強暴を除去しなければならない。」<sup>\*33</sup>と述べている。

胡適も魯迅も貞操は道徳ではないという結論を出し、与謝野晶子の貞操道徳論の主張と一致している。しかし、一方では、与謝野晶子の貞操論に反対する声もあった。それが引き金となって、

胡適と藍志先との間で貞操論争が行われた。後に、周作人は貞操論の翻訳者としての責任を感じその論争に割り込むことになる。

貞操論争は『新青年』第六卷第四号（1919年6月15日）、つまり「貞操論」が発表されてから十一ヶ月後に行われた。胡適と藍志先との間では最初（文学革命）をめぐって討論が行なわれていたが、胡適の「貞操問題」が発表されるや、藍志先がすぐさま異議を唱え、論争は、貞操問題へと移つていった。

以下、貞操問題に絞るその討論の主な内容を紹介する。藍志先はまず胡適の「貞操論争」の論旨を「貞操をもって男女が互いに対する態度とする」「夫婦の間では愛情が全てである」<sup>\*34</sup>という二点にまとめ、それに対して次のように反論する。夫婦関係において愛情が全てであるなら、極めて危険である。なぜなら、愛情は盲目的で変わりやすいものであるからである。従つて、愛情以外に道徳の制裁が必要である。感情的な愛は道徳の洗練を受け人格的な愛に変化してこそ真の愛と言える。貞操は、道徳で人格を制裁するという義務の中にあつて守るべきものの一つである。藍志先は次に、与謝野晶子の「貞操は道徳ではない。貞操は趣味であり、信仰であり、潔癖である」という論に賛成できないと述べる。その理由は道徳は無くしてはならない要求であり、美的宗教的な趣味信仰とは違うからである。

この二点について、胡適はまず基本的に賛成すると表明したあと、続けて「私の言う愛情とは、先生（藍志先・訳者）の言っている盲目的に移り変わりやすい感情的な愛を指しているのではな

い。」<sup>\*35</sup>と述べ藍志先の誤解を指摘する。胡適の言うように、藍志先の意見の展開は的外れているようである。第二点、つまり、与謝野晶子の「貞操は道徳ではない。貞操は趣味であり、信仰であり、潔癖である」という論に対して、胡適は、「道徳」は哲学上、信仰、趣味、潔癖として見ることができると述べ、与謝野晶子の主張に理解の意を示した。

周作人は胡適より先に藍志先の意見に答える形で貞操論争に加わり、藍志先が与謝野晶子の意見を次の三点において誤解したと指摘する。愛情を情欲と誤解した点、藍志先の貞操の意味するところが不明確な点、自由恋愛を乱交と誤解した点である。その後、貞操論争は胡適の返事を最後に幕を閉じた。

この貞操論争はあくまでも両性関係をめぐって行われた新旧道徳観の戦いであった。胡適と周作人は与謝野晶子の新しい道徳を擁護する立場に立ち、藍志先はそれに疑問を持つという立場を取った。藍志先の意見は古い道徳観に基づき述べている部分もあるが、伝統的な道学者の主張とも違うものである。彼はこの論争の中で、自分がかつて妾を持ち、後にその妾を帰らせたと告白している。このことは、彼も一夫一婦を擁護する立場にあることを意味している。したがって、彼を一夫多妻の旧式家庭を望み、或は未だに実践している人達とは一線を画して見るべきである。彼にみられるようにある程度新しい思想を持ち高等教育を受けた知識人の中にも、いまだ旧道徳に対する態度について曖昧なところがあるという当時の状況を見ると、その論争は重要な意味を持つて

いたと言える。張競は「藍志先のように西洋文化を完全に拒絶せず、『文明開化』にも一応賛成する人たちでも、自由恋愛となると、急に硬直化し、絶対に譲らない姿勢を示した」<sup>\*36</sup>と指摘し、自由恋愛の受容において〈藍志先現象〉を分析している。要するに、この論争は西洋の近代的文化概念を受けるプロセスにおける中国の新旧文化の衝突と摩擦の反映であるといえる。恐らく訳者の周作人本人も論争にまで至るとは予想できなかったであろう。実際、与謝野晶子の「貞操は道徳ではない。貞操は趣味であり、信仰であり、潔癖である」という主張に対して、当時の日本でも、反対する意見が多かったようである。例えば、中島徳蔵の意見が代表的である。

### 三 周作人の「霊肉一致」の性道徳観とその形成

本節において、周作人の「霊肉一致」の性道徳観の具体的な内容、W・ブレイクとH・エリスからの受容及びそれを受ける基盤について述べてみたい。

周作人の性道徳観が最も早く示されたのは、一九〇七年の評論「防淫奇策」においてである。

彼は「防淫奇策」で次のように述べている。

『礼記』『礼運篇』は「飲食男女、人の大欲存す」と言う。(中略)したがって、食と欲は人の本性であり、人々はその飲食男女の欲を遂げるなら、邪淫と窃盗の悪が消えるのである。食と

欲が制限されると、その本性を満足させることができなくなり、邪淫と窃盗の悪が発生するのである。<sup>\*37</sup>

彼はここで儒教の基本的経書である『礼記』にある「飲食男女、人の大欲存す」という古人の性欲を論ずる素朴な思想に着目し、それを自分の思想の中に取りこみ、彼の初期の性道徳観を築く基礎とする。つまり、彼は、古人の教えを借りて、人間の性欲、特に女性の性の尊重を主張するのである。これを武器にして女性にのみ禁欲を強要する社会の道徳観念を批判するのである。周作人が後に西洋の近代的な性道徳観を受容する思想的基盤は既にこの時期に備えられたと言えよう。

また、彼はこの文章で、女性の性が無視された状況を具体的に述べたうえで、男性に寛大であり、女性に厳しい貞操道徳によって哀れな状況に置かれた女性に対して、極めて強い同情の意を表わしている。

中国は昔から、地位の高い者であればであるほどその妻の数も多かった。最近、高位高官の者も妾を囲うようになり、多くの女性を奥深い居室の中に屈伏させて、監禁の嚴重さは囚人扱いのようである。また、愛憎も主人の都合のままであり、その寵愛も安定しない。久しく閉じこめられた女は、どうしてその情欲を禁じられるか。また、未亡人や貞女は、まだ若いのに、再婚することが禁じられるのであったため、少しでも禁じられるようなことをしたとしても、どうしてもその不貞を叱ることができ  
きるのか。<sup>\*38</sup>

更に、「男女が愛しあっていると、地位財産の差異によって、その情を遂げることができないのが、それが今日の結婚であり、いずれも感情によって結ばれた結婚ではないのである。自由恋愛によるものではない以上、男女の欲が満足できなくなり、不倫や悪が生じるのも、当然である。」<sup>\*39</sup>と言い、今日の結婚の不合理性を指摘し、自由恋愛こそ古い道徳によって生じた様々な淫悪の行いを消す有効な手段と考えている。この見方は与謝野晶子が「貞操は道徳以上に尊貴である」のなかで述べている「精神的にも肉体的にも唯一を守る結婚と云うものは恋愛結婚以外には遂げられない」といった主張と見事に一致しているのである。二つの文章の書かれた時間的差は八年あるにもかかわらず、思想的な見解上では一致している。これは、彼が後に与謝野晶子の論述に興味を持つようになった基盤であると言える。

人間性の尊重を主張することを中心とした彼のこのような性道徳観は、初期段階ではまだ理論的な要素に乏しいものにすぎなかった。しかし、一九一八年になると、彼は「人の文学」を提唱すると同時に、「女性の存在」をも発見した。彼はこの時期、女性の性の解放を強く主張し、いわゆる、「霊肉一致」の文学観、貞操観を含めた人生観を提示した。彼の貞操道徳についての重要な論述は、「貞操論」より四ヶ月後に発表された「人の文学」（一九二〇年二月）と「平民の文学」（一九一九年一月）に表れている。また、新しい性道徳観と性科学について書いた彼の多くの文章からもその貞操観がうかがわれる。

郁達夫が「五四運動の最大の成功は、第一に個人の発見とみなすべきである」<sup>\*40</sup>と指摘したように、周作人は彼の「人の文学」において「人」を発見した。周作人のいう「人」とは、「動物より進化してきた人類」のことを指す。つまり、動物性と人間性の両方を持つ人間のことを言う。彼はこのような発想から有名な「霊肉一致」の人間性論を主張した。

古人の思想では、人間には霊肉の二元があり、それが並存し、永遠に衝突すると思われていた。肉の一面は獣性の遺伝であり、霊の一面は神性の発端である。人生の目的は、神性を発展させることに偏重してきた。その手段は、体質を減ぼすことによって霊肉を救うことであった。したがって、古来の宗教は、大体禁欲を断行し、様々な苦しい刑罰をもって人間の本能を抑制した。一方、霊肉を無視した快樂派が存在し、ただ「死んだら我を埋葬せよ」と願っただけであった。実は、両者とも極めて極端であり、人間の正当な生活とは言えない。現在になつてはじめて、霊肉はもともと同じものの両面にすぎず、対抗する二元ではないと言いだす人が現れた。獣性と神性は、あわせると人間性にすぎない。(中略) 真実の愛と両性の生活は霊肉一致でなければならぬ。<sup>\*41</sup>

この主張は与謝野晶子の「霊肉一致」の貞操論が想起される。彼女は「貞操は道德以上に尊貴である」の中で具体的に次のように述べている。

貞操は霊肉一致のものとするなら、さう云ふ道德が現在の社会

制度のまままで実現されるでせうか。精神的にも肉体的にも唯一を守る結婚と云ふものは恋愛結婚以外には遂げられない譯ですが、恋愛の自由を許されて居ないと共に、恋愛の自由を享得するだけの人格教育が施されて居ない現代に、霊肉一致の貞操を道德として期待することは蒔かずに刈らうとする類ではありませぬか。

両者とも旧道德からの女性の性の解放を強く主張している。女性の性は最も抑圧の対象とされてきたからである。その意味において両者の霊肉一致論はともに肉の側面に重点を置いてい

る。周作人は女性の問題は経済的解放と性的解放の二大問題であると述べているが、実際は性的解放を特に重視しているのである。彼は「人の文学」において「個人主義な人間本位主義」の人道主義の道德観と「霊肉一致」の道德観を提起した。人道主義を提起した理由の一つとして、彼は墨子の「愛人不外己、己在所愛之中」<sup>\*42</sup>とイエス「隣人を愛するのは自分を愛するのと同様だ」を引用して、人類を愛するためには、まず自分に人の資格を持たせるべきであるという人道主義を主張した。いわゆる個人の発見である。「霊肉一致」を彼の言葉で言い換えれば、「肉の一面は獣性の遺伝であり、霊の一面は神性の発端である。獣性と神性は、あわせるとただの人間性にすぎない。(中略) 私たちの信じている人類の正当な生活は、即ちこのような霊肉一致の生活である。」<sup>\*43</sup>というものである。

周作人がこの霊肉一致の生活を主張するようになったのは、彼

の貞操問題を始めとする女性問題への強い関心と無関係ではない。彼は女性の性が、当時まだかなりの勢力を振るっていた古い道徳に束縛されている現状を見て、女性の性の解放を強く主張するようになったのである。霊肉一致の肉の方に重きを置く理由もここにある。キリスト教や仏教など宗教の如何を問わず、女性のみ禁欲を強要するという宗教の道徳による禁欲主義の本質を認識したうえで、女性の性の解放を強く主張している。

周作人が明白に霊肉一致の主張を提示したのは、「人の文学」においてであり、そのような主張の根拠として、カーペンター、ブレイク、エリスのそれぞれ身体と精神について論じたものを引く<sup>\*44</sup>。まず、「愛の成年」(1918年10月15日)においては、イギリス十八世紀の詩人ブレイクの「赤らんだ手足、燃える髪の上／禁欲 (Abstinence) はいちめんじ砂をまく／しかし、満ちたり欲求は／そこに生命と美の果実を植える」<sup>\*45</sup>という詩を紹介し、「禁欲 (Abstinence)」という言葉に、欲求を不潔なものとして禁圧することへの反発をこめている。更に「人の文学」においては霊肉一致の主張を述べる時、ブレイクが詩「天国と地獄の結婚・悪魔の声」において、「人間は霊魂と分離した身体をもっているわけではない。いわゆる身体とは、もともとはただ五官を用いて見ることのできる霊魂の一部分にすぎないからである。(以下略)」<sup>\*46</sup>と言った説を根拠として引用している。これについて、「彼のこのような話には神秘的な感じがするが、しかし、霊肉一致の肝腎のところをよく言い表しているのである」<sup>\*47</sup>と周作人は言う。つ

まり、ブレイクの霊魂と身体はもともと一つであるという説に基づき、霊肉一致説を主張しているのである。この時期にエリスに対しても関心を持つようになった。周作人は「愛の成年」で、始めてエリスの名をあげ、エリスの「性の進化」と「新精神」を同時に紹介している。エリスの「性の進化」は、女性が出産という機能を有することから社会の保護が必要であると述べた文章で、同じく「新精神」は、女性の体を汚いとする旧来の考えを批判し、科学的な視点で物事を考えるように主張した文章である。つまり、周作人はエリスの女性の性に対する偏見の改変を主張した見解に注目したのである。彼は、カーペンターの『愛の成年』について、「第一章は性欲について論じているが、素晴らしい見解が多く述べられている。彼は、まず人生を肯定し、人間の体と全ての本能欲求を認め、いずれも善美で清潔である。彼がもつとも憎んでいるのは、『人間の全てのことを売買する商人主義、及び隠蔽している宗教の偽善である』」<sup>\*48</sup>と述べ、カーペンターの自由と誠実をもって両性関係の改善を求める主張に共感を覚えている。

周作人は、女性にのみ禁欲を要求する発想は、宗教の女性観に由来すると指摘する。彼は儒仏道三教の女性観について次のように指摘している。「儒教が女性を軽蔑するのはやはり経験によるにすぎないが、仏教は生理にもとづき宗教的な解釈を加えるので、いっそう理屈に合わない。道教が女性を器具として見るのと、その弊害はほぼ同じである。」<sup>\*49</sup>と。この中で、彼は特に仏教の「女性の生理の上に宗教的な解釈を加える」という女性観、つまり「不

浄観」（女性を本来不潔なものとする考え）に痛烈な批判を加えている。周作人は「人間はなぜ自分のことをまるで汚い糞のように思うのか、また、なぜ自分の汗、唾液、精液、月経を汚く思うのか。」<sup>\*50</sup>（『欲海回狂』を読む）1924年）と極く単純で自然な疑問を持ち出し、「不浄観」に対して、次のような「浄観」（清潔な考え）を提示する。「浄観の性教育とは人生を認識することであり、生の一切の欲求を認識することであり、人々に両性の事実について正確な知識をもたせることである。さらに、それに高尚な趣味という教養を加えることで初めて効果がある。しかし、人を導く正しい道はただ順調な人生を過ごすための一種の準備となるだけであり、人に愛欲を捨てさせることはできない。なぜなら、それは人間にはできないことであるからである」<sup>\*51</sup>（同前）と。

周作人のこのような「浄観」の主張には、実は様々な思想が入っている。彼独自のものもあれば、他者から学んだものもある。「人生を認識すること」や「生の一切の欲求を認めること」というのは、「飲食男女、人の大欲存す」の思想の反映、前述したブレイク、カーペンターの主張ではないかと考えられる。「両性の事実について正確な知識」そのものは、『愛の成年』などに学んだことは言うまでもない。なぜなら、もともと中国のいわゆる性教育とは「淫書」に描かれた「淫説」しかなかったし、それに、人間が科学的な性の知識を身に付けたのも近代に入って始めてのことだからである。また、「高尚な趣味」を主張する点は、与謝野晶子の著作にもしばしば言及されていることが想起される。

エリスは周作人にもつとも影響を与えた人物である。周作人は、とりわけエリスの中庸思想に対し共感をしている。彼は、「エリスの思想」において、エリスの中庸思想を、エリス自身の言葉を用いて説明している。「禁欲或は性への耽溺を生活の唯一の目的とする人がいるが、その人は、生活をする前に既に死んでいるのである」<sup>\*52</sup>と。つまり、エリスの中庸思想とは禁欲と大欲の間にあるものを指す。前述のように、周作人は、獣性と神性が、あわさると人間性となるというような主張を提示したが、それは即ち、獣性と神性を調和したようなものであり、彼の中庸思想を代表するものである。周作人はそのような主張を女性観にも発展させた。

私はもとより古代の宗教者がとなえた女性は悪魔であるという説を好まないが、とりわけ女性崇拜者がかたくなに女性をもちあげて聖母とすることも好まない。私が賛同するのは混合説であり、ワイニンガー（Weininger O・訳者）が女性には母婦と娼婦の二面性があると主張するのは、これに近い。（中略）昔の人はかたくなに女性を二つに分け、礼拝したり、呪ったりしたが、今になってはじめて一つにすぎないことが分かった、（以下略）。<sup>\*53</sup>

ここでいう混合説とは、悪魔と聖母とをあわせたもの、即ち、「霊肉一致」の主張にある獣性と神性にあたるのである。要するに、周作人は霊肉一致の主張を女性観にまで発展させたといえる。周作人、与謝野晶子は、両者とも霊肉一致の両性生活を建設することを今後の理想として提唱しているが、それぞれ異なった視点

も有している。周作人が女性の性の解放を普遍的なものとして強調し抽象的であるのに対し、与謝野晶子は彼女の実体験より出発した極めて具体的な意見が多い。また、周作人は霊肉一致論の成立過程において、もともと中国の伝統思想からえたものもあり、西洋近代思想からえたものも多かった。これに比べると、与謝野晶子は霊肉一致の主張自体が何に由来するのかを、あまり論じておらず、そのよつてきたところは不明である。

## おわりに

周作人は自らの翻訳活動の主旨について、「最近三十年における日本の小説の発達について」という講演において、「歴史的な因襲思想を捨て、本心から他人の模倣をしなければならない。(中略)外国の著作の翻訳と研究を提唱する」と述べている。五四新文化運動以前、彼は魯迅とともにヨーロッパの弱小民族の文学を中心にして翻訳し、五四新文化運動以後は、日本文学の翻訳に没頭した。これらはいずれも、梁啓超の「文学は社会を改良する道具である」という主張の影響を受けて、それを翻訳活動において実践したものである。したがって、彼は、翻訳の題材を選ぶに際し、それが名著かいなかよりも、まず内容で選択する。その内容は当時の中国社会に必要かどうかによつて決めるのである。彼は、当時、与謝野晶子の評論を多く読んでいたが、その中から、「貞操は道徳以上に尊貴である」などを意識的に選んだ。このような

選択は、まさに彼の翻訳の主旨から出るものである。「貞操は道徳以上に尊貴である」は、当時日本ではほとんど知られなかったが、しかし、中国で紹介された後、大きな反響を呼んだ。それは、この文章が、当時の中国社会の急所をついたからであるといえる。

「貞操は道徳以上に尊貴である」における、与謝野晶子の「結婚においても、夫婦として肉体的な関係を持ちながら精神的に極めて冷淡であることや、また肉体的な関係も無く精神的にも憎み合いながら同居していることなどは明らかに精神的に貞操を破っていることになるが、それでも、貞操道徳によつて咎められることはない。」という誤った貞操への指摘は、周作人によつて、まるで中国の状況を言っているように感じられ、また、「貞操は道徳ではない。貞操は趣味であり、信仰であり、潔癖である」という主張は彼にとつて極めて新鮮なものであった。与謝野晶子の「貞操論」については、当時日本でも疑問の声があつたが、周作人はあえて、この文章を翻訳した。このことは、中国の女性史において極めて大きな意味がある。彼は、「人の文学」において主張する「神性と獣性を合わせると、人間性になる」という霊肉一致の人間性論を、〈聖母と悪魔が合わさると、女性本来の姿となる〉という女性観にあてて解釈している。女性を一人の人間として見ているから、このような女性論を提示することができたのである。また、彼は、女性の性の解放を人格の認可と性心理・性道徳観の更新の両方から主張し、同時に、道学家の偽善的な性道徳観を痛烈に批判した。周作人は、終始女性を保護し、尊重する立場に立



ち女性解放論を提唱したのである。女性の性の解放を強く主張したのは、当時では極めて重要な意義をもっていた。舒蕪が指摘しているように、周作人は「女性を発見した」<sup>\*4</sup>のである。

以上、周作人と与謝野晶子の女性観を女性解放論の側面から考察してきた。周作人が終始女性の解放を主張しつづけてきたことは、彼が外国研究者の女性問題論を研究紹介したことによって理解できる。一方、与謝野晶子の女性解放論を現在読んでも示唆を受けることが多いことから、彼女の大正時期の評論について再確認する必要があると思われる。

## 注

\*1 劉岸偉『東洋人の悲哀——周作人と日本』（河出書房新社、1991年）は序章において、次のように解釈している。

「漢奸」という言葉は日本語に直訳すれば、「漢民族の裏切者」という意味になる。この呼び名は清朝の末期、アヘン戦争前後に侵入したイギリス軍に情報を提供し、その通訳や水先案内人をつとめた邪悪な漢人を指して用いられたのが最初であるらしい。（中略）要するに、「漢奸」とは中国の民族利益と自分の魂をとともに異民族の敵に売り渡す「利を見て義を忘れる」無恥な徒を指すのである。

\*2 1918年5月『新青年』第4巻第5号

\*3 「貞操は道德以上に尊貴である」は1915年1月に発表、初出は不

明。1916年4月天弦堂書房刊行の第三評論感想集『人及び女として』（『定本与謝野晶子全集』第15巻p.130）所収。

\*4 1923年7月15日「晨报副鐫」に発表、『自分の畑』に所収、「周作人文類編」第5巻p.22

\*5 「愛の創作」は1922年11月20日に発表、初出は不明。大正12（1923）年4月アルス刊行の第十一評論感想文『愛の創作』（『定本与謝野晶子全集』第18巻p.311）所収。

\*6 明治43＝1910・3～9、明治44＝1911・1～6「女学世界」

\*7 本稿において、引用文献は、全て『周作人文類編』（中国湖南文芸出版社、編者鐘叔河、1998年9月）と『定本与謝野晶子全集』（講談社、昭和55＝1981年5月）によるものである。また、周作人の中国語の原文及び中国語の先行論の引用を日本語に翻訳したのは、本稿の論者である。ただし、訳文は全て鹿児島大学高津孝教授の校正を経ている。

\*8 1918年10月15日『新青年』第5巻第4号、『談龍集』に所収。『周作人文類編』第5巻p.6

\*9 1918年12月『新青年』第5巻第6号、『芸術と生活』に所収。『周作人文類編』第3巻p.31

\*10 原題：張鐵榮「關於周作人的貢獻與評價問題——中国現代文学史問題的思考之三」（『人文科学論集』25 信州大学人文学部 1991年）。原文：「人の文学」第一次系統地指明了五四新文学的發展方向，為五四以後的新文学的誕生奠定了重要的理論基礎。

\*11 1918年4月19日、北京大学小説研究会で行われた。『芸術と生活』に所収。『周作人文類編』第7巻p.233

\*12 原文：日本の文化，大约可以说是「创造的模拟」。……：日本の文学界，因为有自觉，肯服善，能有诚意的去「模仿」，所以能生出许多独创的著作，造成二十世纪的新文学。

\*13 原文：中国讲新小说也二十多年了，算起来却毫无成果。

\*14 原文：中国人不肯模仿不会模仿。……不肯自己去学人，只愿别人来像我。即使勉强去学，也仍是打定「中学为体，西学为用」。

\*15 原文：须得摆脱历史的因袭思想，真心的先去模仿别人。随后自能从模仿中蜕化出独创的文学来，日本就是个榜样。

\*16 原文：便是提倡翻译及研究外国著作。

\*17 原文：中国要新小说发达，须得从头做起，目下所缺第一切要的书，就是一部讲小说是什么东西的《小说神髓》。

\*18 『現代日本文学年表』（現代日本文学全集別巻2、筑摩書房、昭和33年）、『青鞞』女性解放論集（堀場清子編 岩波文庫 1991年）、『定本与謝野晶子全集』（講談社、昭和35年）を調べたところ、一九一四年から一九一七年にかけて、貞操について多く論じられていたことが分った。

\*19 「鏡心燈語」〔初出…『太陽』大正4（1915）年1月～3月。大正4年5月金尾文淵堂刊行の第二評論感想集『雑記帳』（全集第14巻）所収〕

\*20 渡邊澄子『日本近代女性文学論——闇を拓く』（世界思想社、1998年）

\*21 原文：从前专作和歌，称第一女诗人，又是古文学家，……：后来转作评论，见识议论，都极正大。据我们意见，是现今日本第一女流批评家，极进步，极自由，极真实，极平正的大妇人。

\*22 原文（「女人的文章」1944年10月『古今』57期、『周作人文类编』第5

卷p.404）：男子有三分之一以上是多妻的。

\*23 原文（钱理群『周作人传』p.205）：这是被压抑的、渴求解放的中国妇女的福音！这是一切在传统婚姻枷锁下痛苦挣扎着的中国人的福音！

\*24 注28参照。

\*25 『周作人日記』（大象出版社1996）一九一八年を調べたところ、三月から九月にかけて、与謝野晶子の既刊第二、三、四、五、六評論感想集、即ち『雑記帳』（大正四＝1915年5月、金尾文淵堂）、『人及び女として』（大正五＝1916年4月、天弦堂書房）、『我等何を求むか』（大正6＝1917年1月、同上）、『愛、理性及び勇氣』（大正6＝1917年10月、阿蘭陀書房）、『若き友へ』（大正7＝1918年5月、白水社）を購入したことが記されている。このことから、周作人の与謝野晶子への関心の有り様がうかがわれる。

\*26 原文：女子自己不管，男子也不得不先来研究。一般男子不肯过问，总有极少数先觉了的男子可以研究。我译这篇文章，便是供这极少数男子的参考。

\*27 高素素「女子問題之大解決」（1917年5月1日『新青年』3巻3号）

\*28 木原葉子「周作人と與謝野晶子——『貞操論』・『愛の創作』を中心に」（東京女子大学『日本文学』第68號、昭和62年9月）

張競「五四運動前後の中国における西洋文化の受容と日本——与謝野晶子の『貞操論』をめぐる——」（『比較文学研究』東大比較文学会編1991年11月）

\*29 その第一条第二項は女性に関する条例となっており、「婦女の節烈貞操を以て世の模範とするに足る者」を挙げる。更に六月に、その

条例の実施細則が公布されたが、「烈婦とは30歳以前に寡婦となり50歳以上まで再婚しなかつた者、烈婦烈女とは強暴な行為に遭遇して抵抗し死亡もしくは自殺したもの・夫の死後殉死した者、貞女とは年限は烈婦と同様で、夫の死後も夫の家に残つた者を指す」という内容であつた。このほか、女性の自由恋愛は許されないとか、妾を持つても重婚とはされない等の条例があつて、いずれも男性本位のものであつた。「小野和子「五四時期家族論の背景」(同朋社、1992年)より」

\*30 原文(「貞操論」P.422):女子の問題、终究是件大事情、須得切实研究。

\*31 原文:周作人先生所译的与谢野晶子的贞操论(本报四卷五号)我读了很有感触、这个问题、在世界上受了几千年无意识的迷信、到近几十年中、才有些西洋学者正式讨论这个问题的真意义。(略)如今家庭专制最厉害的日本居然也有这样大胆的议论!这是东方文明史一件极可贺的事。

\*32 原文:中国的男子要他们的妻子替他们守贞守节他们自己却公然嫖妓公然纳妾公然「吊膀子」。

\*33 原文:要除去世上害己害人的昏迷和强暴。要除去制造并赏玩别人苦痛的昏迷和强暴。

\*34 原文【「蓝志先答胡适书」(1919年4月15日「新青年」第6卷第4号)P.447】:以贞操为男女相待的一种态度、夫妇之间是纯以爱情为主。

\*35 原文【「胡适答蓝志先书」(1919年4月15日「新青年」第6卷第4号)P.467】:我所讲的爱情、并不是先生所说盲目的又极易变化的感情的爱。

\*36 注28参照。

\*37 原文:《礼记》「礼运篇」有云、饮食男女、人之大欲存焉。……是则食色二端、为人本性;人人各遂其饮食男女之欲、则淫盗之恶息。至于食色二端加以限制、使之不能遂其性、则淫盗之恶遂生。

\*38 原文:中国自古以来、位愈尊者妻愈多、近则贵显之民亦恒蓄纳、使多数之妇女屈伏深闺之中、防范之严、有若囚徒、又爱憎由己、宠幸靡恒。久闭之女、安能禁其无情欲之私?又既寡之妇、守贞之女、虽当青年、亦禁再嫁、稍逾防检、安能遽斥其不贞?

\*39 原文:两情相悦、以门第财产之差别、不克遽遂其情、是则今日之婚姻、均非感情上之婚姻也。既非出于自由恋爱、则男女之大欲不克遂、淫恶之生、乃事所必然。

\*40 原題:郁达夫「中国新文学大系·散文二集序」(1935年4月)。原文:五四运动的最大成功、第一要算「个人」的发现。

\*41 原文【「人的文学」(1918年12月「新青年」第5卷第6号)·周作人文类编「第3卷P.33」】:古人的思想、以为人性有灵肉二元、同时并存、永相冲突。肉的一面、是兽性的遗传;灵的一面、是神性的发端。人生的目的、便偏重在发展着神性;其手段、便在灭了体质以救灵魂。所以古来宗教、大都厉行禁欲主义、有种种苦刑、抵制人类的本能。一方面却别有不顾灵魂的快乐派、只愿「死便埋我」。其实两者都是趋于极端、不能说是人的正当生活。到了今世、才有人看出这灵肉本是一物的两面、并非对抗的二元。兽性与神性、合起来便只是人性。……真实的爱与两性的生活、也须有灵肉二重的一致。

\*42 『墨子』大取。「人を愛することは自己を除外することではない、自己も愛される対象である」という意味。

\*43 原文:肉的一面、是兽性的遗传;灵的一面、是神性的发端。……

兽性与神性，合起来便只是人性。……我们所信的人类正当生活，便是这灵肉一致的生活。

\*44 羅鋼は、周作人の「靈肉一致」論は厨川白村の『文芸思潮論』（1914年）の思想から生まれたと指摘し、「厨川白村のいわゆる靈肉一致とは、人間の正当な肉体的な欲求と健康的な自然本能の十分の満足、及びそのような基礎の上に成り立った人間の精神の自由發展を強調している」と述べている。

原文：罗刚「周作人的文艺观与西方人道主义思想」（『中国现代文学研究丛刊』1987年第4期）；厨川白村所说的灵肉合一，强调的是人的正当的肉体欲求和健康的自然本能的充分满足，以及建立在这种基础上的人的精神的自由发展。

\*45 ブレイクの詩の中国語訳「周作人「爱的成年」（『周作人文类编』第5卷P.8）：红的肢体，火焰般的头发上，禁戒（Abstinence）播满了沙……但满足的欲求，种起生命与美的果实。ブレイクの詩の日本語訳は、小川利康氏が「周作人とH・エリス——一九二〇年代を中心に——」（早稲田大学大学院『文学研究科紀要別冊』15、1988年）において調べたものを引用した。

\*46 原文「『人的文学』（1918年12月『新青年』、『周作人文类编』第3巻P.33）：人并无与灵魂分离的身体。因这所谓身体者，原只是五官所能见的一部分的灵魂。

\*47 原文：他这话虽然略含神秘的气味，但很能说出灵肉一致的要义。

\*48 原文：第一章论性欲，极多精义。他先肯定人生，承认人类的身体和一切本能欲求，无一不美善洁净；他所最恨的，便是那「买卖人类一切物事的商贩主义，与隐藏遮盖的宗教的伪善。」

\*49 原文（「读欲海回狂」1924年2月16日「晨报副镌」，『周作人文类编』第5巻P.30）：儒教轻蔑女子，还只是根据经验，佛教则根据生理而加以宗教的解释，更为无理，与道教之以女子为鼎器相比，其流弊不相上下。

\*50 原文（同右P.29）：我们真不懂为什么一个人要把自己看做一袋粪，把自己的汗唾精血看得很是污秽？

\*51 原文（同右P.30）：净观的性教育则是认人生，是认生之一切欲求，使人关于两性的事实有正确的知识，再加以高尚的趣味之修养，庶几可以有效，但这疏导的正路只能为顺遂的人生作一种预备，仍不能使人厌弃爱欲，因为这是人生不可能的事。

\*52 原文（「葛理斯的思想」1944年7月26日「华北新报」，『周作人文类编』第5巻P.140）：有人以禁欲或耽溺为其生活之惟一目的者，其人将在尚未生活之前早已死了。

\*53 原文（「北沟沿通信」1927年12月1日『蔷薇』周年增刊，『周作人文类编』第5巻P.103）：我固然不喜欢像古代教徒之说女人是恶魔，但尤不喜欢有些女性崇拜家，硬颂扬女人是圣母……。我所赞同者是混合说，华宁格耳之主张女人中有母妇娼妇两类，比较地有点儿相近了。